



1. 大学運営への学生参加
2. 予測の可能性
3. スチューデントパワー
4. 貴重な小石

1. 大学行政への学生参加という問題が、揺れ動く学園騒動を背景に、名古屋大学医学部、大阪市立大学医学部とたてつづけに決定された。このような大学運営に対する学生の参加という事実は、きわめて進歩的な解決のように見える。しかし、はたして、これが進歩的民主的といえるかどうかはきわめて疑問が残る。と同時に、このような場合でも一向に若い研究者・教官の声が前面に出てこないのは何故だろうか？現在の大学教育には、学生との対話がないとよくいわれている一端の因はこれらの若い教官にもあろう。すなわち、教えられた教授の下で助手・講師・助教授と進んでいく過程はきわめて安易な道であり、それにしがっているかぎり十分な意見をいうことができなくなってしまうのも不思議はない。これらを考え合わせると、現在の大学の発展には、学生参加という形式的な解決でなく、若い研究者が1ヵ所にどまることなく、他の大学と交流して自己の意見を十分に発表できる場を得、学生とじかに話し合うことによって解決していくという手段が必要なのではなからうか。水は1ヵ所にいとどむと同様、人間もまたよんどくることは防ぎたいものである。土木に関するマンズリートピックスとは一寸はなれているけれども大学生を送り出している土木の世界の共通の話題として、本月のトピックスとしてあえて学校運営の学生参加問題を取り上げた次第である。 [C]

2. 11月から12月にかけて全国的に暖かく乾燥した天候が続き、関東地方では24日におよぶ無降水日数を記録した。ところが、その幕切れとなった12月5日には未明から夜半までの間に東京では12月の平均月雨量(約60ミリ)に匹敵する雨量が記録された。無降水期間中は火災が多く、風邪がはやる反面雨にたたられた10月の分を取り返すかのように行業の秋を楽しむ人が多かった。幕切れの冷たい雨は通勤者にとって有難くは無かったが、ボーナス日の帰宅を早める効果が大きかったとか。晴上がった翌日の空からはスモッグが一扫されて、久しぶりに東京から富士山を拝むことができた。この雨は、たまたま干天の滋雨となった感が強いが、もう少し雨量強度が強かったら都市河川がはらんしたかも知れないし、気温が低かったら大雪になって各地で交通マヒその他の被害がでたに違いない。自然がどこまで気まぐれであり得るのか、確かなことは予測不可能と思っていた方がよい。また、気まぐれのもたらす影響は社会の発展とともにさまざまに変貌して行くものであるが、この方はある程度確かな予測ができるのではなからうか。 [S]

3. 今年もどうやら終りに近づいてきたが、年の暮になるとまずその年の回顧を行ない来年の展望に思いをはせるのが通例である。その意味で今年1年を回顧してみると土木の専門的分野はともかくとして、われわれに直接または間接に関連のあるできごとといえれば何といても大学紛争の問題であろう。いわゆるスチューデントパワーの問題は日本だけのものではなく今や世界的なものになっており、その背景にはいろいろな相違があるが現象には共通したものがみられるようである。

特に東大における紛争は今や深刻な様相を呈しており、全学生の留年および新入生の入学延期はもはや避けられないかの模様である。このような大学紛争に対する各界の受取り方にもいろいろあるようであるが、大体において「これらの運動はごく一部の限られた学生だけのものである」というどちらかという楽観的な考えが支配的なようである。この考えは現実と比較してみたとき、あまりにも自分側に有利なものであり、暗黙に自分側の責任回避を示しているものであろう。また、逆にこの運動がいわれているようにごく一部の学生だけのものであるとすれば、残りの学生はその数において圧倒的多数を占めているわけで、この大多数の学生が全然無力なのか、または自分の責任を回避しているものであれば、これらの学生に将来を託している日本の将来はまさに憂慮されるものであろう。いまや、大学紛争の場において日本の国民性は試験を受けているといえるのではないだろうか。 [J]

4. 道路に落ちていた小石1つで、大事故を未然に防いだ道路マン・山本新一、柴田晃男の両君の働きはさすがしい。12月5日午前11時頃、国道19号を巡回していた建設省飯田国道工事事務所木曾維持出張所の両君は、道路に落ちていた直径約15cmの小石から道路の上部をはいる国鉄中央線線路上の土砂くずれを発見、国鉄に知らせることにより発生するであろう大事故を事前に防いだわけであるが、職務に忠実であっただけでなく、ただ一個の小石からこの危険な状況をつかんだ両君の判断的的確さは、立派であった。近時、ひん発する国鉄・私鉄等のハプニング事故も、つまるところ各自の不注意とか、職務に対する責任感の不足といえるケースが多いだけに、人の命をあづかる職責にある者は、このことを十分に考えてもらいたいと思う。土木技術者は、この責にある場合が多いだけに考えさせられる美談ではある。

[E]